

むかし、あるお寺（三十三間堂）に、化け物が出るというわさがありました。それで、日が暮れると、だれもその辺りにはよりつきませんでした。そこで、お殿さま（天皇）が、

「化け物を退治した者には、何でも望みの物をほうびにあたえる」と、おふれを出しました。

あるとき、酒の好きな男が、

「おれが、その化け物を退治してやろう」といって、ひょうたんにお酒を入れて、お寺に出かけて行きました。

男がお堂のすみにすわって待っていると、夜中ごろ、背が一丈もある大坊主があらわれました。目はお日さまのように光っていて、熊手のような大きな手で男をつかまえようとしました。

男は、床にひれふしていいました。

「あなたは、あの有名な化け物さまでございますか。わたしのような者の前にあらわれてくださって、ありがとうございます」

化け物はものすごい声で笑って、うれしそうにいいました。

「おまえは変わった男だなあ。ひと口に食べてやろうと思っていたが、しばらく許してやろう。おまえは、どうしてここに来たのだ」

「どうしてといつて、わけはございません。けれども、化け物さまはいろいろに化けることができると思っています。ちよつと、美しい女の人に化けてみてくださいませんか」

男がいうと、化け物は喜んで、

「では、望みどおりに化けて見せてやる。そのあとでおまえをひと口に食べてやるぞ」といって、たちまち、美しい女の人に化けました

「なんと、おもしろいですねえ。こんどは、子どもに化けてみてくださいませんか」

化け物は、すぐにかわいらしい子どもになりました。

「何にでも化けるんですねえ。ついでに、鬼に化けてみてくださいませんか」

化け物は、一丈ばかりの鬼になって、角をふりたててみせました。

「化け物さまは、ほんとうに化けるのがうまいですねえ。いったとおりに化けられるんですねえ。でも、梅干しみたいな小さなものにはなれないでしょう」

化け物は、それを聞いて、

「梅干しになったら、あきらめておれに食われるか」といいました。

「はいはい、喜んで食われましょう」

「ふふん。それなら、梅干しに化けてやろう」といって、化け物は、たいそう小さな梅干しになって、ころり、ころりと転がりました。

「なんと、うまくお化けになりましたねえ。わたしの手の上に上がって、よく見せてください」

男が手をさし出すと、梅干しは、ころりと転がって手の上に乗りました。

男は、梅干しをそのまま口へ放りこみ、がりがりとかんで、飲みこんでしまいました。それから、ひょうたんのお酒を飲んでいい気分で、帰って行きました。

お殿さま（天皇）は、男に、たくさんのほうびをあたえたということです。
おしまい

原話…『諸国百物語』（『江戸怪談集下』高田衛校注／岩波文庫）

再話…村上郁